

2017.9.7 ミセス 10月号

10

October 2017 No.754

創刊号(1953年10月)以来三連刷製版  
2017年9月17日発行・発売(毎月17日発行・発売)  
ミセス連絡部754号

ファッション特集

## ニュー エレガンスを 作る3つの条件

女性の印象は  
“ベースメイク”で  
決まります

建築家・  
安藤忠雄さん  
未来をつくる

きのこ料理

長谷川博己  
連載「時代を創る男たち」

満島ひかりさん、  
人間国宝のアトリエを訪ねて

# フランスの 最も美しいもの がやって来る!

メゾン ディオール、  
壮麗なる70年

〈とじ込み付録〉  
ランチが魅力の  
銀座の  
レストラン  
38軒

伝統と革新の街、

# 銀座

森パメラさんと星さん母娘、  
木村多江さん、青木奈緒さんほか

1. 一流がそろうブティック
2. 世界の逸品が集まる街
3. 最高の料理店
4. 和の文化を楽しむ
5. “今”を感じるアート
6. 空間を楽しむカフェ
7. 女性どうして入れるバー
8. 喜ばれる手土産

36 〈特集〉

# フランスの美しいものが

## やって来る！

満島ひかりさんが出会う

フランスの人間国宝が生み出す美の世界

62 満島ひかりさんと巡る  
メゾン・ディオール、壮麗なる70年

164 〈特集〉

# 伝統と革新の街、

# 銀座

川と路地と、空と文・平松洋子

166 一流がそろうブティック

174 世界の逸品が集まる街

188 最高の料理店

200 作家 青木奈緒さんが楽しむ和の文化

210 今を感じてアート

222 空間を楽しむカフェ

226 女性どうして入れるの？

228 喜ばれる銀座の土産

229 〈とじ込み付録〉

# ランチが魅力の銀座のレストラン



ポスター  
A Comedy of Sighs  
オーブリー・ピアズリー  
1894年

© Victoria and Albert Museum, London

ミセス  
Contents  
October 2017  
10

## 〈表紙の人〉

撮影・中川真人(3rd)  
スタイリング・Baby mix  
ヘアとメイクアップ・山下サユリ(3rd)  
インタビュー・辻 さゆり

ノーカラーのツイードのジャケットと同素材のプリーツスカート。ポーのついたクラシックなデザインのシルクのブラウスは、バックスタイルが印象的に。ジャケット(320,000円)、ブラウス(170,000円)、スカート(185,000円) グッチ(グッチ ジャパン)

みつしま・ひかり 1985年生れ。音楽ユニットFolderとしてデビュー。NHKドラマ「トットとれび」で黒柳徹子を、TBSドラマ「カルテット」で世吹すずめ役を、そして7月に公開された映画「海辺の生と死」では、作家島尾敏雄の妻、ミホをモデルにした大平トエを演じて話題となった。「百鬼オペラ 羅生門」は、9月8日～25日、東京・渋谷のBunkamuraシアターコクーンで上演。



## 満島ひかりさん

パリで人間国宝の職人とムッシュ ディオールの足跡を訪ねた満島ひかりさん。職人が手がけた作品の一つ一つ、ディオールのデザイン画の一本一本の線から、作り出すものへのあふれるような愛情を感じたようだ。「羽根細工作家のネリー・ソニエさんがなでるだけで羽根に艶が出て、魔法のように体に密着する。傘作家のミシェル・ウルトさんのペンテージの傘のコレクションを見て『この中にはあなたが前世で作った傘もあるんじゃないか』と言ったら『僕もそう思うよ』と。お会いしたかたたちは、みんなどこか自分と感性が似ていて、アンテナはピツと張っているけれど、根底には平和な川が流れている感じ。大好きなことを仕事にしている人ならではの喜び、ものに対する愛おしさ、純粹さが伝わってきて、とても幸せな気持ちになりました」

その満島さんが、舞台において感性の“つながり”を感じているのが、イスラエルの鬼才と呼ばれる演出家、インバル・ピントとアブシャロム・ボラックだ。2013年に東京芸術劇場で彼らが手がけたミュージカル「100万回生きたねこ」は、斬新な演出と満島さん初のミュージカル出演ということで大きな話題となった。そしていよいよ9月にはBunkamuraシアターコクーンで彼らの新作「百鬼オペラ 羅生門」が上演される。芥川龍之介の代表作

「羅生門」に、「藪の中」「蜘蛛の糸」「鼻」のエッセンスを絡み合わせ、音楽やダンスを交えたというもので、満島さんは前作に続く出演となる。

「インバルとアブシャロムは、大好きな演出家。演出だけでなく美術や衣装、振付けも自分たちでやるから細部に至るまで彼らの息吹が届いているんです。出演者一人一人に対して演出が違い、衣装も、同じピンクであっても私の肌に合わせてからオートクチュールのように色を選ぶ。その繊細さ、愛情あふれる舞台作りは、パリの職人さんやムッシュ ディオールと通じるものがあります」

輪廻転生をテーマに、現実とファンタジーを鮮やかに融合させたインバルとアブシャロムの世界観。満島さんは、「彼らが自分が本来持っているものを初めてちゃんと引き出してくれた」と話す。

「小さい頃から空想癖があって『変わってるね』と言われることが多かったのですが、彼らはそれをもっともすてきなこと、スペシャルなことだよとってくれる。今回の舞台も、役者とダンサー、音楽家の組合せがおもしろく、自由で型にはまらないから、ずっとドキドキが途切れない。きっと楽しんでいただける舞台になると思いますよ」

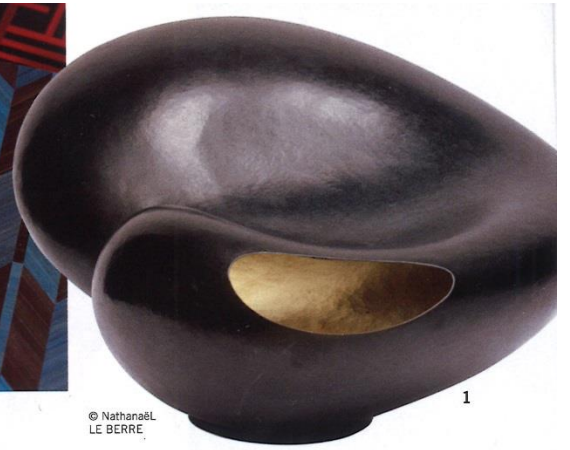


3

© Hélio'g



2



1

© Nathanaël LE BERRE

# フランスの美しいものが やって来る!

満島ひかりさんが会う  
フランスの人間国宝が生み出す美の世界

## WONDER LAB

〈フランス人間国宝〉

[展覧会情報は61ページ]

フランスには、日本の通称“人間国宝”のような、伝統的な技と芸術性を備え、後世に伝承するため弟子を育てている人に与えられるメートル・ダールという称号があります。その称号を持つ13名と、次期有力候補の2名のアーティストがこの秋東京国立博物館 表慶館で作品を披露。これに伴い『ミセス』ではその15名のクリエイションをご紹介します。さらにその中の二つのパリにある工房を、女優の満島ひかりさんが訪問。フランスからやって来る最も美しいものをここで。

写真の人・満島ひかり/撮影・37, 39, 41, 43, 45ページは中川真人(3rd)、  
46~55ページは武田正彦 Masahiko Takeda、  
40, 44ページは濱 千恵子 Chieko Hama/スタイリング・Baby mix  
ヘアとメイクアップ・山下サユリ(3rd)  
取材、文・46~49, 57~59ページは田村有紀 Yuki Tamura、  
50~55ページは水戸真理子 Mariko Mito(本誌・リ支局)  
協力・エールフランス航空、ルレ・エ・シャトー、HEART & crafts  
※写真の作品はすべてが展示されるものではありません。



5



4

© Greg GONZALEZ



8



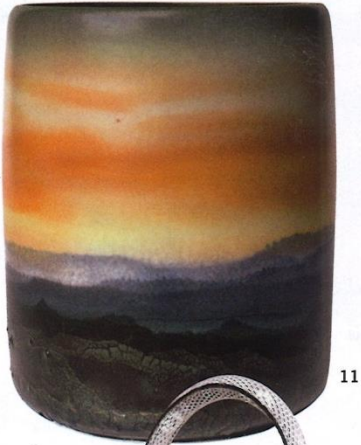
7

1 真鍮細作家、ナタナエル・ル・ベールさんの作品。2 麦わら象嵌細作家、リゾン・ドゥ・コーヌさんの作品。3 銅板彫刻作家、ファニー・ブーシェさんの作品。4 傘作家、ミシェル・ウルトーさんの作品。5 金銀細作家、ロラン・グラスプさんの作品。6 エンボス加工作家、ロラン・ノグさんの作品。7 鼈甲細作家、クリスティアン・ボネさんの作品。8 ガラス作家、エマニュエル・パロワさんの作品。表記のない写真はすべて© Philippe Chancel



6

36



© Stephen Jackson

“一つのことに  
夢中になると、  
こんなにすばらしい作品が  
生まれてくるのですね”



37

14

9 紋章彫刻作家、ジェラルド・デカンさんの作品。10 折り布作家、ピエトロ・セミネリさんの作品。11 陶芸作家、ジャン・ジレルさんの作品。12 革細作家、セルジュ・アモルソさんの作品。13 壁紙作家、フランソワ＝グザヴィエ・リシャルさんの作品。14 羽根細作家、ネリー・ソニエさんのアトリエにて。15 扇作家、シルヴァン・グエンさんの作品。



重なり合う鮮やかな羽根が  
とても生き生きとして

一枚一枚を美しく染め上げた羽根のコスチュームのクローズアップ写真。それぞれのフォルムを生かしながら作られたコスチュームは、軽やかさと動きが感じられる。© CÉCILE ROUGE

# 羽根細工

ネリー・ソニエ

彼女の手によって、  
羽根はさらに美しく生まれ変わる

自然光がたっぷり入る白いアトリエ。  
真っ白なキャンバスにカラフルな絵の具が  
置かれるように、このアトリエでさまざまな色の  
羽根細工の作品が生まれます。  
ソニエさんの手によって生まれ変わる羽根。  
優しく、柔らかく、華やかに。

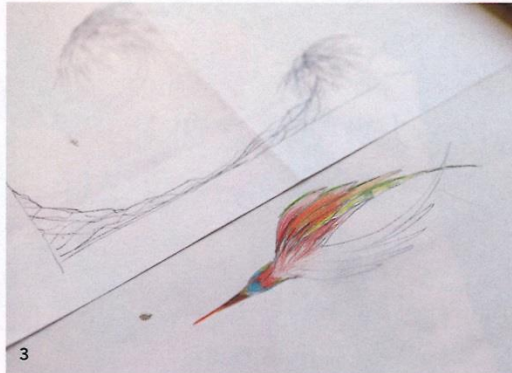


“ソニエさんが羽根に触れると、羽根が  
つやつやしてくるんです。まるで魔法をかけたみたいに”

Nelly Saunier

1964年生れ。2008年メートル・ダール認定。  
'09年手の賢さに捧げるリリアンヌ・ベタンクール賞受賞。  
'12年芸術文化勲章受章。

「ここで一緒に撮りましょう！」と満島さん。二人が立ったのは  
白いガチョウの羽根を赤く染めてつるしてある場所。ふわふわ  
した羽根と戯れるように。



### 一枚一枚の羽根がソニエさんにとってのアート

1 羽根の形をそろえ、色の調子を見ながら一枚一枚の羽根を重ねて。© Philippe Chancel 2 淡いピンクからグリーンへと、パステルカラーに染められたガチョウの羽根。このようにいつも色のコンポジションを大切にしている。3 作品に取りかかる前のソニエさんのデッサン。イメージしたものを表現するための大切な作業。4 白いテーブルにたくさんの羽根が並べられて。5 ソニエさんのデスク回り。デザイン画や試作パーツ、たくさんの色彩道具がそろえられて。

パリ一四区のアーティストたちがアトリエを構えるアパルトマンに、ネリー・ソニエさんのアトリエがあります。天井の高い白い空間には色鮮やかな羽根。まるで鳥が飛んでいるようにあちらこちらに飾られています。

幼い頃から自然の中で鳥や木々に囲まれて育ったソニエさんが、羽根の美しさに出会ったのは一四歳の時。羽根細工アートの世界を発見し、すぐにそれが天職だと悟ったそうです。そして今では、一三世紀のフランスの羽根飾り職人の技を引き継ぐ唯一の職人となりました。使う羽根の種類は多く、青鷲、白鷲、カワセミ、鷺、コンゴウインコ、ピンクフラミンゴなど入手が難しいものから、農地に集まるキジ、ヤマウズラ、マガモまで。一枚一枚の特徴を生かすなど、羽根への深い造詣を駆使して作品を作り上げます。国際法を順守するため、素材となる羽根の調達には彼女なりのこだわりがあります。「羽根に魅力を感じるからこそ、鳥の種の保存についても誰よりも考えます。そのため材料は骨董商のものや在庫品。そして希少な鳥に至っては羽根の生え変わる時期を狙って採取したりします」ともからの鮮やかな色を生かしたり、素材によっては染色する場合があります。

その繊細かつ大胆な発想はファッションデザイナーから注目を浴びています。過去にはジャンポール・ゴルチエ、ニナ・リッチ、オリビエ・ティスケンスとのコラボレーション作品を発表。また、二〇一五年には京都のヴィラ九条山でいけばの巨匠である珠寶さんともコラボレーション。ファッションをはじめとするさまざまな分野との深いつながりが、さらにソニエさんの作風に深みを与えているようです。





鳥の羽根を再形成して、  
空想の鳥のオブジェのように

アトリエの一角に置かれた大きな花のオブジェ。そのパーツを手にとった満島さんは「ほら2羽の鳥みたい」と。この作品は東京での展覧会で披露される予定。ブラウス(168,000円)、指輪(21,000円)、ブレスレット(フェーつきは28,000円、ゴールドとグリーンは38,000円) フェンディ(フェンディ ジャパン)

# 傘

ミシェル・ウルトー

## 傘に魅せられ、情熱を注ぎ込んだアーティスト

傘を愛してやまないウルトーさん。ビンテージの傘に魅せられ、  
コレクションの数は2,000本を超えるそうです。  
華奢な柄、贅沢な素材のノブ、鮮やかな素材、美しいフォルムからは  
究極のエレガンスを感じます。



さすたびに  
楽しい気持ちになる傘。  
しずくも傘の上で踊るよう

鮮やかなオレンジ色の傘に赤いしずくが渦を巻くようにハンドペイントで描かれている。2013年に製作された、ウルトーさんがデザインした傘。使われている素材はシルクタブタ。

© Greg GONZALEZ

中棒にブナ材を使用した、ウルト  
ーさんがデザインした日傘。英国  
刺繍を施した黒いシルクタフタが  
品のよさを醸し出す。

“クローゼットの引出しには、  
傘という夢がたくさん詰まって”

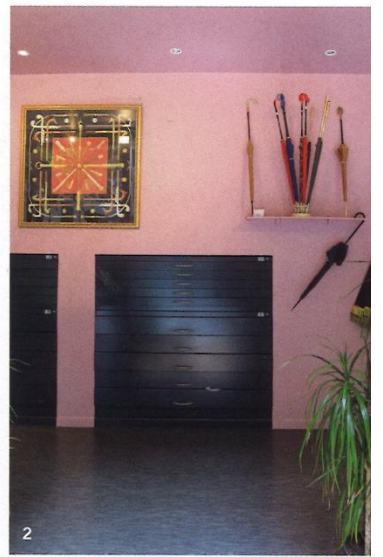
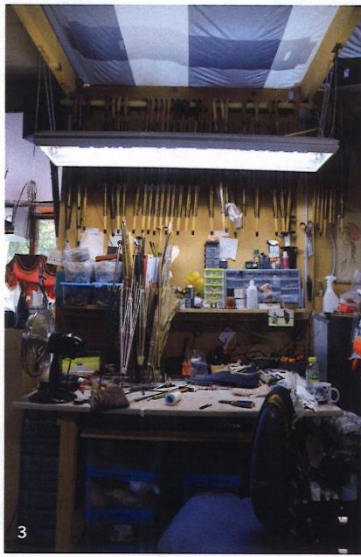
Michel Heurtault

1966年生れ。  
2009年Entreprise  
du Patrimoine Vivant  
(文化遺産企業)認定。  
'13年メートル・ダール認定。

三歳の時から傘で遊んでいたというミシェル・ウルトーさん。ウルトーさんにとって傘は初めて手にするおもちゃだったのです。傘を分解しては、そのメカニズムを理解し再び復元するという作業が何よりも楽しかった幼少期。その情熱は冷めることなく続き、傘の組立てはもちろん、素材の選び方やカッティングに至るまで独学で学びました。一八歳の時、コスチュームデザイナーとして活躍していた時期にイヴ・サンローランから日傘をオーダーされ、そのことがきっかけとなって傘の製作に専念することに。

「そんなウルトーさんのアトリエは、パリ市が昔の鉄道の高架下跡をアーティストに貸し出している「ヴィアデュック・デ・ザール」という場所。このアトリエはショップも兼ねていて、古い部品の修復と、現代の傘・日傘の製作の両方を同時に行なうところ。ショップにあるクローゼットには、ウルトーさんの貴重なビンテージの傘のコレクションが保管されています。またウルトーさんは二〇〇年以上も前の傘のパーツを収集していることでも有名。髄甲や琥珀、象牙、クリスタルが使われたエレガントなノブやシャンティイレースやシルクシャンタンの布。これらを使うことで唯一無二のオートクチュールの傘がで上がります。

新しい傘の製作。傘の修復。映画や舞台用の傘の製作。この三つがウルトーさんの仕事。「どれがいちばん楽しいですか？」という質問に間髪入れずに「傘の修復です」と。そして「贅沢な素材を使った美しい傘の、その美しさを再現することに喜びを感じます」と語ります。



### 高架下の夢が詰まったアトリエで

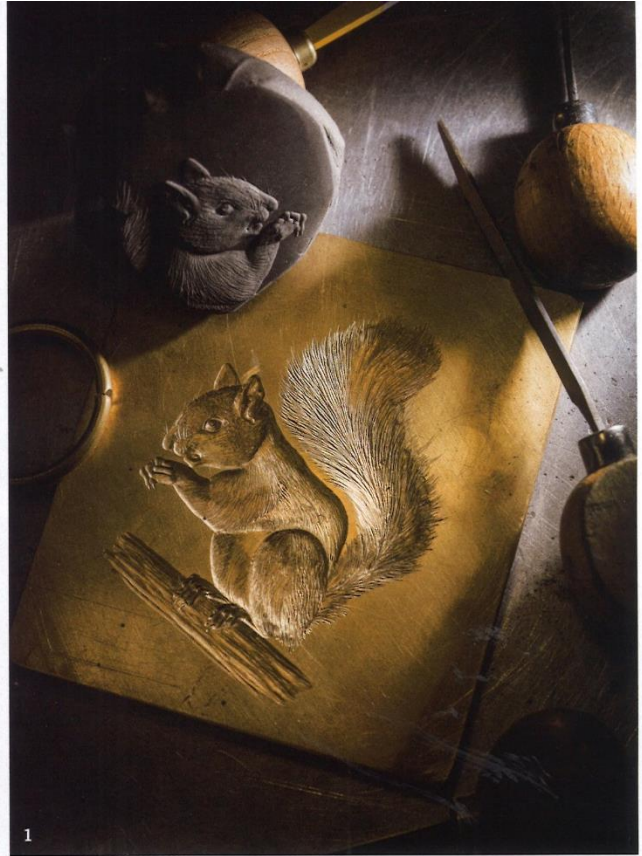
1 ショップ奥にあるアトリエ部分。2 ショップにあるクローゼット。この引出しにはビンテージの傘が保管されている。100年以上前の傘も少なくない。3 ウルトーさんの作業台。4 アトリエ&ショップの外観。アーチのファサードが傘のフォルムに似て。左 ウルトーさんがデザインした傘。2015年製作。素材はシルクタフタ。アール・ヌーボー模様のシルク地で縁どられ、骨を湾曲させてバゴダ(寺院、仏塔)の形が作られている。  
© Greg GONZALEZ



100年以上前の傘が  
ウルトーさんの手によって  
美しく生まれ変わって

ウルトーさんが修復した1880年頃の傘。レースの裏の布が劣化したため張り替えたもの。外側を覆うレースは、ハンドメイドによる一枚仕立てのシャンティイレースで、その透け感がドラマティック。ワンピース(290,000円)、靴(97,000円)、指輪(43,000円) グッチ(グッチ ジャパン)





## 新旧の技術を融合、最先端の紙加工が生まれる現場

1 手彫りの彫刻版。同じものを機械で彫るプログラムを自社で開発中。2 仕上りを確認するノグさん。3 今も漆喰で版(雄型)を作る工房はノグさんのところだけ。樹脂にはない適度な硬さが得られるという。4 裁断の作業。5 エンボス加工と箔押しを施した作品。

# エンボス加工

ロラン・ノグ

手仕事のぬくもりと、機械の精度を融合させる

古代の硬貨製造を起源とし、一六世紀に製本工が用いたことで広まったゴフラーージュ(エンボス加工)。紙の表面の文字や絵柄を浮き上がらせて陰影を生み出す技術は、常に付加価値の高い作品を求める高級品産業で重宝されてきました。

ロラン・ノグさん率いる「クレアノグ」は、特殊な紙加工技術で知られる工房です。設立時より高級メゾンと密接に連携し、紙を使った新しい表現の地平を切り開いています。

「優れたエンボス加工には、手仕事のぬくもり、一定不変の再現性のいずれも欠けてはなりません。しかしある時点で、私は限界に直面しました。手彫りでも、機械でも実現できない図版を要求されたのです。革新のポイントは、型となる彫刻版にあると気づきました」



Laurent Nogues

1968年生れ。2008年  
Entreprise du Patrimoine Vivant  
(文化遺産企業)認定。  
'11年メートル・ダール認定。  
'15年手の賢さに捧げる  
リリアヌ・ベタンクール賞受賞。

そしてノグさんは約二年前、手彫りの利点を取り込んだ独自の彫刻機のプログラムを開発し、誰も見たことのないエンボス加工の実現に成功。ハニカムパターンに不規則な起伏を設けたその魅力的な絵柄は、老舗香水メーカーのディスプレイに採用されました。

ノグさんは、新旧の技術どちらかの二者択一ではなく、両方の利点を受け止め、前進することを目指したいと言います。

「私の挑戦は、古来の職人技を今日的にすること。誰にとっても、すばらしいゴフラーージュは見るだけでなく、つい、触ってみたくなるものです。触れることで、感受性の扉がまた一つ開き、感動の機会が生まれます。紙の触感を通じたコミュニケーションは、大きな可能性を秘めています」



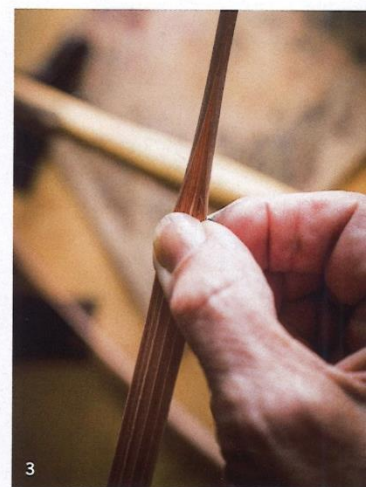
感覚を刺激する、  
古くて新しい  
エンボス加工の魅力

白い紙の上に現われる、光と影の戯れ。天使の羽の一本一本まで、くっきりと浮かび上がる。細心の配慮は、真鍮の型作りから紙選びにまで至る。ノグさんの工房の研究により、これまで困難とされてきた大きい寸法のものや、複雑なエンボス加工も可能になった。



### フランスで唯一、 麦わら象嵌細工のみを 手がけるアトリエ

1 工房では、複数の注文品の製作が同時進行中。2、3、4 昔も今も、道具はすべて手動だ。最も重要なのは、切れ味のいい裁断用の刃と糊づけ用の象牙のへら、そして指先の勘。5 ライ麦は2メートル以上に成長した茎をはさみで節ごとに切断し、丁寧に乾燥させ染色した最上級品。



# 麦わら象嵌細工

リゾン・ドゥ・コーヌ

温かく慎み深い、麦の輝きに魅せられて

誰もいなかった。初めの二〇年間、祖父が残した麦わらを使って修復だけを行ないました。その後の二〇年は、クリエイションに専念しています。それだけ、この工芸の人氣が戻ったということです。材料のライ麦はブルゴーニュの生産者のもと手作業で収穫・染色され、工房に届きます。そして軸を開いて平らにした麦わらを、土台となる木材または薄紙に一本一本糊づけ。繊維の向きによって、独特の濃淡、光と影が生まれます。ドゥ・コーヌさんの麦わら象嵌細工は、世界中の名だたる高級店や個人邸宅、船舶の室内装飾として引く手あまた。職人のチームを率いながら、「革新的な色づかいや、金属などの異素材との組合せにも挑戦していきたい」と語ります。



Lison de Caunes

1948年生れ。  
'98年メートル・ダール認定。  
2011年レジオン・ドヌール勲章  
シュバリ工受章。

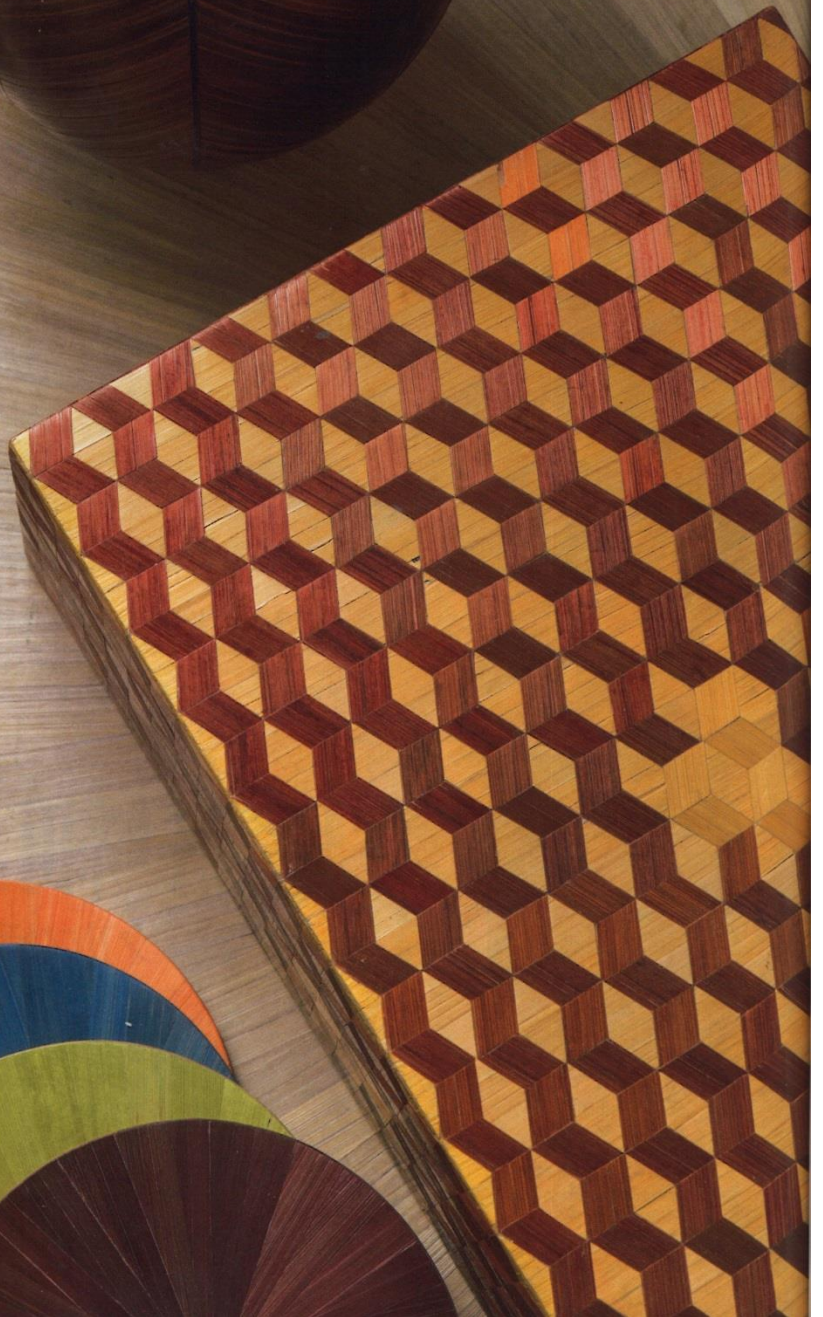
一七世紀から続く、フランスの麦わら象嵌細工。一九世紀には、海辺に幽閉された流人らによって飾り箱や小物が作られ、広く普及しました。麦わら象嵌は、その慎ましい歴史と素材の平凡さゆえに、貧しき者の黄金の別名を持ちます。現在、フランスで唯一の麦わら象嵌専門の工房を営むリゾン・ドゥ・コーヌさんは、「粗末とされてきた素材が、優美な作品に変身する。それがすばらしい」と賛嘆します。ドゥ・コーヌさんがこの工芸と出会うきっかけを作ったのは、祖父でアール・デコの時代の著名なデザイナーのアンドレ・グルー氏でした。

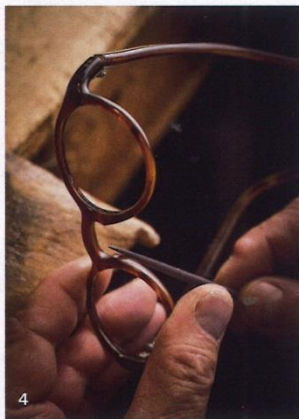
「祖父の麦わら象嵌の家具が、幼少から身近にありました。学校を出て、麦わら象嵌で身を立てたいこうと決めた時、この工芸は時代遅れで職人は



小物から什器まで、  
色やパターンも自由自在

昔ながらの上品なブラウンのグラデーションに限らず、キャンディのような鮮やかな色彩も人気。模様も定番のソレイユ(放射状)以外に、複雑な幾何学模様、曲線を多用した迷彩やヒョウ柄などを手がける。国内外のデザイナーとのコラボレーションも多数。





### ボネさん独自のテクニックが使われる鼈甲の眼鏡作り

1 使い慣れた道具に囲まれたボネさんの仕事場。2 最も高級なブロンド色の甲羅。金より高く取り引きされているそう。3 いくつもの小さな鼈甲をつなぎ合わせる作業。ボネさんが独自に開発した方法で、貴重な材料を無駄なく活用できる。4 縁をやすりで削って形を整えていく仕上げの工程。

# 鼈甲細工・メガネ

クリスティアン・ボネ

著名デザイナーから  
大統領までを顧客に持つ  
鼈甲細工の巨匠

オーダーメイドの眼鏡メーカー「メゾン・ボネ」。顧客には、ル・コルビュジエ、フランソワ・ミットラン、マリア・カラスなどの著名人たちが名前を連ねています。イヴ・サンローランもその一人。ダークな色の鼈甲眼鏡は、インテリジェントで気品のあるデザイナーを引き立て、彼のアイコンとなりました。

一九八〇年よりメゾンの代表を務めるクリステ

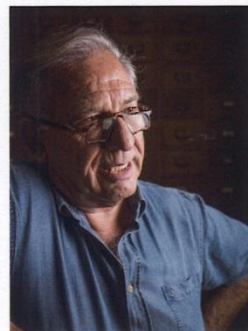


長きにわたって愛用できる  
「メゾン・ボネ」の  
鼈甲の眼鏡フレーム

顧客のために先代であるお父さまが40年前に作り、ボネさんが修理した眼鏡。「メゾン・ボネ」の鼈甲のフレームが長く愛着を持って使われることを証明している。

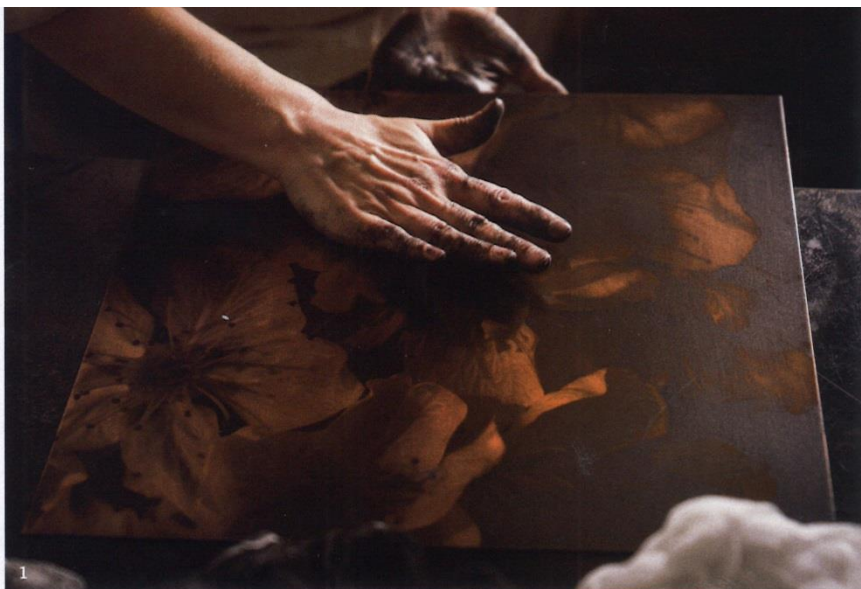
イアン・ボネさんは、三世代にわたる家の伝統を受け継いだ鼈甲細工職人です。一四歳から父のもとで眼鏡の製法を学び、そのかたわらパストゥール光学学校で理論的な勉強も重ねました。一〇年前には、パリの中心にブティックを開店。「この眼鏡をかける時、ほかのものがかけられなくなる」と評判が広がり、海外からの訪問客も絶えません。人間の顔の形は少しだけ左右不均等なのですが、一〇か所以上を採寸し、調整を重ね作られる眼鏡は、ずれ落ちることも一点に負担がかかることもなく、びったりとフィットするように仕上げられています。

また、フランス最後の鼈甲細工職人の一人でもあるボネさんは、一九七〇年代以降、ワシントン条約により規制された鼈甲を無駄なく利用するために、小さな欠片どうしを圧着する独自の技術を開発しました。素材の持つ有機的特性を生かした新しい作品のクリエイションや古い工芸品の修復にも取り組み、数年前からは日本の屋久島のウミガメ保護活動にも参加しています。「使いたいと思う鼈甲は、いい一生を送って年をとり、死を迎えた亀のものです。その甲羅を美しいオブジェに変えて永続させること。それが私の理念です」そう情熱的に語るボネさんから鼈甲への深い愛情がうかがえます。



Christian Bonnet

1949年生れ。  
2000年メートル・ダール認定。  
'07年Entreprise du Patrimoine Vivant  
(文化遺産企業)認定。  
'08年レジオン・ドヌール勲章受章。



### 手作業で一枚一枚 刷り上げられる作品

1 余分なインクを拭き取る作業。インクの量で写真の濃淡が変わるため、仕上りのよしあしを決める大切な工程。最後は手の感触が頼り。  
2 銅版にインクをのせるブーシェさん。3 作品が刷り上がった瞬間。  
4 写真が壁いっぱいには貼られたアトリエ。左につるされているのは、展覧会に出品する製作途中の立体作品。



# 銅板彫刻

## ファニー・ブーシェ

### 新次元のアートを開拓するフランス唯一のエリオグラビュール作家

的な作品製作にも挑戦しています。「伝統的なエリオグラビュールと革新的な立体作品の作業はまったく違うものですが、それぞれに興味深い仕事です。イノベーションのために歴史を勉強することもあるんですよ。例えば、球体のオブジェを作った時には、一九世紀に出された特許の資料を探する必要がありました。あることを解決するために当時のセラチンの作り方を理解しなければならなかったから。未来へ進むには過去が必要。二つの仕事は異質なものですが、それらが融合し、新たなものが生まれるのです」東京の展覧会では、侍のよろいをテーマにした立体作品で、強さと繊細さ、光と影、習熟した技術と絶え間ない改革などを表現するというブーシェさん。創造性豊かな彼女の作品は、未知の可能性を秘めています。



Fanny Boucher  
1976年生れ。2006年  
Entreprise du Patrimoine Vivant  
(文化遺産企業)認定。  
'15年メートル・ダール認定。

ユネスコに無形文化遺産として登録されているエリオグラビュールは、銅板と感光性のセラチンを用いた製版の技法。古くは一九世紀に使われていたもので、最も美しい印刷技法として知られています。この技術を習得している職人は世界で一人程度、フランスではファニー・ブーシェさんのみです。彼女の他にも、草間彌生、ウイリー・ロニ、ベルナルド・ベネなど、著名な写真家やアーティストから依頼が寄せられてきました。手作業による複数の工程を経て、一枚一枚刷り上げられていく作品。彼女の持つエネルギー、手の感触が仕上りを左右する鍵となります。またブーシェさんは、銅版を単なる印刷の道具ではなく、アート作品としてとらえることでまったく新しい工芸美術を開拓。さらには二人の弟子とともに、立体

## 作り手のエネルギーを伝える エリオグラビュール

凹版画の一種で、非常に繊細な線を表現することができるエリオグラビュール。深みのあるグレーのグラデーションが美しく、銅版そのものもアート作品としてめだられている。感光性ゼラチンを通して版がエッチングされる時、自身のエネルギーが伝わり酸の動きに影響を与えるのだそう。「魔法の瞬間ですね」とブーシェさん。





### 全身全霊で打ち込む ハンドメイドの仕事

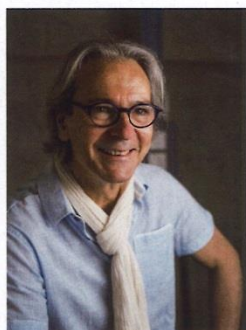
1 ハンドステッチをするアモルソさんの手。2 天然の模様がアクセントになったガルーシャのポーチとサイフ。素材をどのように使うかは重要なポイントで、裁断前には素材を何度も眺めたり触ったりし、「皮革との対話」に一日を費やすこともあるそう。3 道具や材料。中央は製品の葉巻入れ。ふたの飾りには隕石が使われている。奥にあるのはマンモスの牙。4 全神経を集中させて行なう最後の仕上げ。異素材の組合せ、隠れた色の遊びが彼の作品の特徴でもある。5 アトリエ兼ショールーム。世界中に顧客を持ち、王室からの注文も受けている。

# 革細工

セルジュ・アモルソ

皮革を操り、無類の一級品を作り続ける永遠の挑戦者

象など、あらゆる素材の美しさを引き出し、装飾には隕石の破片やマンモスの牙など、希少なマテリアルを使うことも。常に高みを目指す彼は、現状にとどまることなく、新たな可能性を追い続けています。「もし、完璧なものを作ったと自分が満足したら、仕事を辞めるでしょう。私の目的はこれまで以上にいいものを作ることです。いつも新しい製法を考えていますが、重要なのは結果です。技術は何かを伝えるための手段でしかありません。絵画と同じで、見た人が受け取るエモーションや仕上がりが大切だと思っただけです。そのために、従来の法則に反することもいとみません。完璧さというのは到達できないもの。だからおもしろいのです」唯一無二の価値あるものを創り出す手仕事。そこにあるのは本物の贅沢です。



Serge Amoruso

1959年生れ。  
2010年メートル・ダール認定。

好みの色と形、機能性に富んだディテール、厳選された素材……オーダーメイドのバッグはどんなブランド品より愛着を持って使えるもの。理想の一点をリアライズできるのは、豊かな経験とイノベーションの精神を持った職人だからこそ。それを教えてくれるのがセルジュ・アモルソさんです。エルメスのアトリエでノウハウとスキルを培った彼は、約一〇年間、教育現場で自身の情熱を伝授します。並行し、ヒマラヤ登山やインド北部の旅、日本での合気道の修行など、自己探求に取り組み、一九九五年にパリにアトリエを設立しました。皮革小物から室内装飾に至るまで、個々のニーズに応える彼は、想像を超える仕上りで顧客たちを驚かせています。フランスのなめし皮革にこだわり、特注で染色。ワニ、ガルーシャ、サイヤ



素材の特性が活かされた  
オリジナルなバッグ

手前のクロコダイルのバッグには側面に子牛革を使用。きものに合うものが欲しいという日本人の顧客のためにデザインした。丸いフォルムは急須がイメージソース。後ろのバッグは、クロコダイル、カーボンファイバー、レザーをミックス。質感の違う三つの素材が、上品でモダンなハーモニーを奏でている。

色、立体感、光沢……  
絶妙なバランスで  
空間を美しく演出する壁紙

エンボス加工、銀紙の印刷、フロッキ加工、さらには石紙という劇場のセットで3次元のモチーフを作り出すために使われるものまで。リシャールさんの手によって、伝統ある壁紙はさまざまなアプローチで、新しい息吹がもたらされる。写真すべて © Philippe Chancel



その後もモニュマン・イストリック（歴史的建造物協会）のための古い壁紙の修復をすると同時に、オーダーメイドの壁紙の製作、フォンテーヌブローやシャンティイの城など、フランス、アメリカ、ベルギー、ポルトガル、イタリア、イギリスにある多数の歴史的建築物の壁紙も担当するようになりました。現在リシャールさんは、オーダーが入るたびにそれが伝統工芸を再発見するチャンスと考え、最新のテクノロジーを駆使するなど常に新しいエッセンスを投入して革新的な物作りに挑戦しています。

フランス・アンジエの国立高等美術学校を卒業した後、劇場の舞台美術家としてキャリアを積んだフランソワ・グザヴィエ・リシャールさん。一九九七年に手刷り木版による壁紙印刷に出会ったことで、一八世紀までさかのぼる歴史を持ちながら、二〇世紀半ばには完全に忘れられていたこの伝統の道に踏み込む決意をしました。そしてその二年後、二七歳で自らのアトリエを設立し、初仕事として一九世紀の小説家ジュールジュ・サンドの家の壁紙を手がけることに。

# 壁紙

フランソワ＝  
グザヴィエ・リシャール

壁紙で、美しく優雅な  
空間を演出する作家



最新のテクノロジーを取り入れつつも、何世紀の間使われている天然色素やウサギの皮膚から作られている接着剤など、昔から変わらない材料もある。モチーフに色をのせる作業は今も手作業で行なわれる。



Francois-Xavier Richard

1972年生れ。  
2009年手の賢さに捧げる  
リリアヌ・ベタンクール賞受賞。  
メートル・ダール有力候補。



光と戯れ、注目を集める  
新しいアクセサリ  
としての芸術品

オートクチュールで使われる最高品質の素材を厳選して、精密で華やかな扇を製作。この作品は、白骨に彫刻を施した扇骨を開くと、オーガンディの扇面にとりつけた同素材の花が、ポップアップの仕組みで表裏に現われる「ホワイト・ウェディング」(2010年作・長さ26cm)。紙はクリスタル製。

© Stephen Jackson



一〇歳で初めて扇を作ってから、扇の創造性を開拓し続ける作家のシルヴァン・ル・グエンさんは、フランスで最年少のメートル・ダールです。八世紀頃に日本で発明された折畳み式の扇は、カトリクス・ド・メディスにより同国に広まり、一七、一八世紀に黄金期を迎えました。宮廷の淑女たちが愛した扇は、扇面に緻密な絵画、羽根や刺繍、扇骨に細かい彫刻を施した象牙や鼈甲などが用いられ、絢爛豪華さを極めました。扇は富や権力の象徴であり、また官能的なコミューニケーションの小道具であったことは有名です。ル・グエンさんは、扇の豊かな歴史や伝統だけでなく、人々を永遠に魅了する扇の「魔法」に着目しています。たとえば折り目を開くたびに、可憐な花や蝶が現われる、驚くべき作品。日本の折り紙からヒントを得たというポップアップの仕組みを持つ扇は、前例のないものでした。斬新な試みは素材使いにも及び、チタンやレザーを使ったモダンな作品も製作。若き扇作家は、いにしえの魅惑的なアクセサリを現代に生き生きと花開かせています。

# 扇

シルヴァン・ル・グエン  
芸術的感性と数学的な計算で、  
扇の魔法を追求



Sylvain Le Guen

1977年生れ。  
2015年メートル・ダール認定。



雑誌の切抜き、非対称、真四角のフォルムなど、製作は好奇心をくすぐる素材や形の研究からスタート。設計図を描き、実寸の模型を作り、開閉動作を完璧に仕上げる。

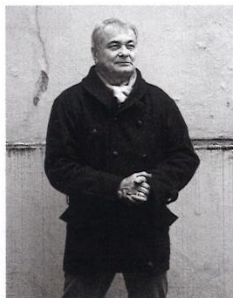
写真下3点 © Philippe Chancel



洞窟壁画や古代エジプトのヒエログリフを連想させる、デカンさんの円筒印章を写した立体作品。未来に向けて、自然への敬意について語りかける。

# 紋章彫刻

ジェラルール・デカン  
時を超えて、生のあかしを  
刻むメッセンジャー



Gérard Desquand

1951年生れ。  
'79年フランス国家最優秀職人賞受賞。  
2006年メートル・ダール認定。

フランスに残るわずか四名の紋章彫刻家の中でも代表的存在のジェラルール・デカンさんは、自らの使命を「人間の歴史を永続させること」と言います。「人は常に、記号や文字を刻み、自らの足跡を残そうとしてきました。私はその伝達役です」

家族の記憶を紋章でとどめる場合、その「版」として最も一般的なものはシグネットリングです。小指の根もとに収まるほどの小さな紋章は、その小ささゆえに家族史が「凝縮」され、また愛着を持つ



パンチ父型を慎重に金  
属片に打刻し、母型を作る。  
顕微鏡をのぞきながらの作業は、長年の経験がものをいう。  
写真すべて© Philippe Chancel

て身につけることができます。デカンさんはさらに、独創的な記録のオブジェとして六千年前の古代メソポタミアから伝わる円筒印章を、現代によりみがえらせました。第一作「方舟」では、真鍮の円筒に現在の絶滅危惧種を含む動物が無数に刻まれています。陶磁器やガラスなど、あえて壊れやすい媒体に印章を転写し、生物界のもろさを連想させます。デカンさんは研鑽を積み極めた技をもって、見る者を果てしなく長い歴史の旅に誘うのです。

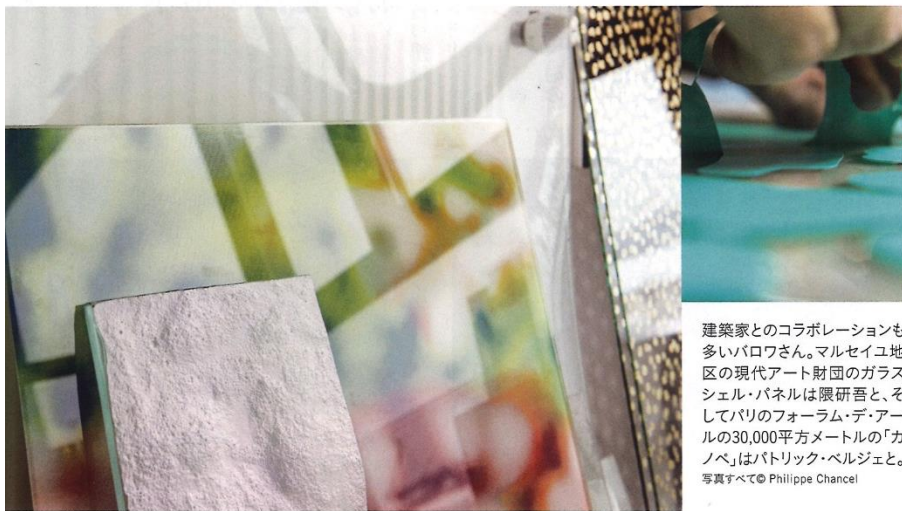
# ガラス

エマニュエル・バロワ  
光と影。透明と不透明。  
それらが引き出すガラスの美



Emmanuel Barrois

1964年生れ。  
2010年メートル・ダール認定。



建築家とのコラボレーションも多いバロワさん。マルセイユ地区の現代アート財団のガラスシェル・パネルは隈研吾と、そしてバリのフォーラム・デ・アルの30,000平方メートルの「カノベ」はバトリック・ベルジェと。  
写真すべて© Philippe Chancel

# 陶器

ジャン・ジレル  
夢の地でかなえる、  
天目の永遠の美しさ



独自の視点から天目の美しさをとらえた、ジレルさんの「建盞」研究を記すシリーズ。曜変天目の再現にも挑戦。



Jean Girel

1947年生れ。  
2000年メートル・ダール認定。

ブルゴーニュ地方のル・シャトーに残る、旧瓦工場。広大な肥土の堆積場を有し、近くには森林と、豊かな水源。ジャン・ジレルさんは、自ら「夢の地」と呼ぶここに工房を構え、火と土の芸術を日々極めていきます。鉱物や土を世界各地の採掘場から厳選して調合。改良を重ねた自作の窯で、東洋と西洋の陶芸を融合させた名作の数々を生み出しました。

「焼き物は五感に訴え、手にする者に知性と魂を与えてくれる」と  
ジレルさん。四二年前、匠を陶芸の世界へといざなったのは、パリのギメ東洋美術館で出会った中国宋代の陶磁器でした。とりわけ製造方法が、いまだ明かされておらず、現存する完成品は日本に伝来した三個のみという国宝の曜変天目は、匠の心をとらえて離しません。展覧会には、活動初期より続けられてきた研究と成果を発表。ジレルさんが創造した茶碗の宇宙は、時空を超えて神秘的な輝きを放ちます。

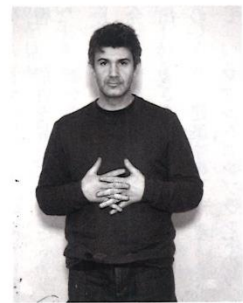
フランス各地、レユニオン、マダガスカル、ニュージーランドなどから原料を取り寄せて調合。道具や窯も手作り。  
写真すべて © Philippe Chancel



# 真鍮細工

ナタナエル・ル・ベール

金属に、有機的な感触や表情を与える

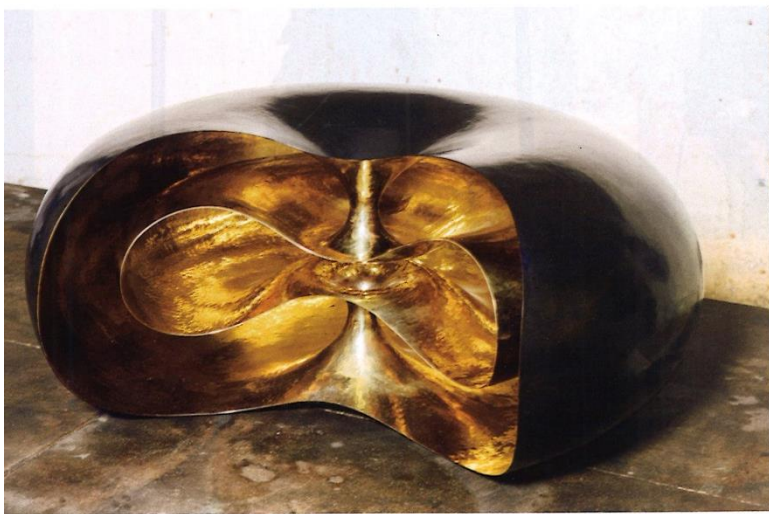


Nathanaël Le Berre

1976年生れ。  
2014年手の賢さに捧げる  
リリアンヌ・ベタンクール賞受賞。  
メートル・ダール有力候補。



「現代空間は、直線に支配されている」と指摘するル・ベールさんは、柔らかに有機的なフォルムを追求。左のオブジェ「無限」は果実の断面から着想を得た。  
写真すべて © Philippe Chancel



「二世紀頃、銅鍋の製造が盛んだったベルギーの町ディナンに由来する「Dinander」という言葉は「鍛金師」を指しますが、現在の技能を知る人は多くありません。真鍮、錫、銅などの板金を表裏から叩いて立体へと立ち上げる最古の金属成形技法は、近代以降、機械に取って代わられました。このような中、数少ない現代の鍛金師ナタナエル・ル・ベールさんは、この技の特徴として「人間らしいリズム」があると言います。「ひと打ちひと打ち力を込めて打たれ、エネルギーを注がれた地金は、人肌のような相、独特の表情をたたえます。私が費やした時間も吸収される。人は、それを感じる事ができます」

二〇一四年、高名な「手の賢さに捧げるリリアンヌ・ベタンクール賞」を受賞したル・ベールさんのオブジェ「無限」は、稀有な職人技と繊細な感性が光る傑作です。ル・ベールさんは今後、鍛金の技がより広く認められ、継承者が増えることを願っています。

# 金銀細工

ロラン・ダラスプ  
硬い素材が生み出す  
柔らかいフォルム



Roland Daraspe

1950年生れ。  
2002年メートル・ダール認定。  
'06年Entreprise du Patrimoine Vivant  
(文化遺産企業)認定。  
同年手の質さに捧げる  
リリアヌ・ベタンクール賞受賞。

金銀細工の伝統技術を後世に伝える数少ない伝承者の一人、ロラン・ダラスプさん。金物職人としての訓練を受け、航空機械学を学んだ後、一九七八年に金銀細工に専念することを決意。一九九〇年代初頭にはポルドー装飾美術館で展覧会を開催し、作品は名工の手によるものと認められることとなりました。今も新しい技法や素材の組合せを試しながら、常に革新を追い求める彼は、繊細なハンマーの叩き出しをしながら、美しい曲線や、優しくならかな曲面を

生み出していきます。使われる素材はシルバー、ニッケルシルバー、亜鉛、シルバーと銅の合金。また金や貴石なども使用。ダラスプさんは国立博物館が所蔵するアンティークの金銀細工の修復を手がけたり、アート作品なども製作しますが、美しさを追求するだけではなく、細部にも気を配った機能性のある物作りにもこだわりがあります。エリゼ宮に迎えられる国賓へのギフトを一〇年以上担当したことも納得できます。

新しい素材、フォルム、技術に対する熱い研究心が、オブジェに魂を与えている。

写真すべて © Philippe Chancel



# 折り布

ピエトロ・セミネリ  
直線が立体となって  
織りなす力強いアート



Pietro Seminelli

1968年生れ。  
2006年メートル・ダール認定。  
'11年Entreprise du Patrimoine Vivant  
(文化遺産企業)認定。

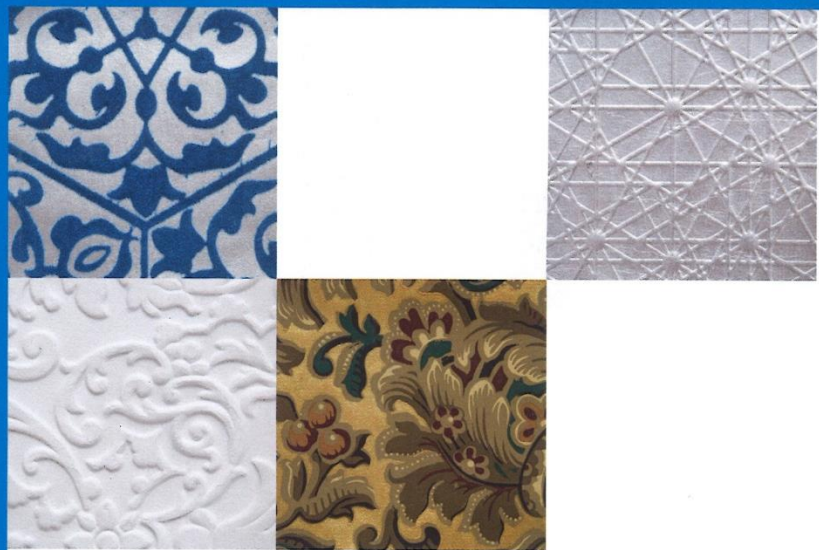
家具製作やインテリアデザインを学んだ後、数少ないフランスのブリーツ職人からノウハウを学び、ブリーツの技術や自然を幾何学模様で表現するテクニクを習得したピエトロ・セミネリさん。一九九六年、ノルマンディにアトリエを構え、折り紙を応用した今までにない新しいアートを生み出し、ファッションやインテリアの世界に新しい芸術表現をもたらしています。複雑な図式をデザインし、それをブリーツの山折りと谷折りの繰返しで立体的に仕上げ

いく作品は、まるで生地を使った彫刻のよう。布のしなやかさが力強く変化しているのが伝わってきます。ブリーツの配列に無限の可能性を見いだしたセミネリさん。紙から布に、そして布からまた新しい素材でブリーツを表現することを試みています。彼の創作はさまざまなクリエーターの目にとまり、建築家のピーター・マリノとファッションブランドのプティックの装飾を手がけたほか、二〇一六年にはヨウジヤマモトのプティックで作品を発表しています。

数学者のような正確さで複雑な図式をデザインし、平面の布に根気よく折り目をつけてゆく。右の作品のタイトルは「力の荘厳」。

写真すべて © Philippe Chancel





# 「フランス人間国宝展 WONDER LAB」

## 手に宿る知性を形にする匠たち

文・長谷川香苗



フランスワグザヴィエ・リ  
シャルさんの壁紙のモチ  
ーフ。東京で行なわれた「フ  
ランス人間国宝展」の記者  
発表会で配布されたプレス  
キットに同封されていたも  
の。撮影・福田典史(本誌)



伝統技術の保護を目指す日本の重要無形文化財保持者(通称「人間国宝」)認定の取組みに、フランスでも共感の声が上がりが、これにならって人間国宝に相当する「メーテル・ダール」という称号が一九九四年に設けられました。その認定基準は伝統的かつ希少な技能の第一人者であるだけでなく、革新的技術の開発においても力量を発揮していること、さらにその技を次世代に伝承することに積極的であること。現在、フランスで対象となっている職種の数は二一七。その中から陶芸、ガラス細工、金細工、羽根細工など一五種の分野の伝統工芸を紹介する展覧会が東京で始まります。職種の中には日本ではなじみのない特殊な技能もあ

り、キュレーターを務めるエレヌ・ケルマシュテールさんは「フランス文化のよき理解者である日本の皆さんにとっても、新たな発見を提供したい」と展示に向けて抱負を語ります。たとえ紹介される技の一つに麦わら象嵌細工があります。もとは一七世紀から一九世紀にかけて修道女、徒刑囚などが麦栽培で余ったわらを使って実用品を作ったことに始まるといわれていますが、決して片手間ではできない手の込んだもの。その後、二〇世紀に入って途絶えていたこの手法をよみがえらせ、ついでにやテーパートップなど今の暮らしにかなった装飾品に応用した職人の発想の自由さと、実用性を越えた芸

術の域に高める技に目をみはる思いです。「日本の皆さんにもおなじみの扇も展示されますが、見たことのない扇となっていると思います。とはいえ、作った職人のインスピレーションは日本の折畳みの扇子から来ていると知ると驚くことでしょう」。「作品には作った職人の経験や信念すべてが表われます。その意味で、職人の生き方が形となったものといえます。ものを見せるだけでなく、職人が毎日どのように自らの職と向き合っているのかも感じていただける展示にしています」フランスの哲学者の言葉を借りるとすれば、手に知性が宿っているということなのでしょう。

### WONDER LABとは

フランスの多様性に富む伝統工芸を現代的な新しいアプローチで紹介し、伝統の技とそれを極めた匠たちを通して、その驚きに満ちた華麗なる世界を探索するプロジェクトが「WONDER LAB」。フランスの伝統工芸の世界を未来につなげる取組みをしています。

WONDER LABの発起人となったのは、フランスの伝統工芸を手がける作家のさまざまな文化活動を企画する「HEART & crafts」。フランスと世界各国を結び、フランスの伝統工芸の発展と周知に努めています。今回は「人間国宝」の原点である日本を世界巡回展スタートの地として選び、東京国立博物館の表慶館で開催される展覧会「フランス人間国宝展」を日仏の工芸分野における本格的な交流の第一歩と位置づけ、両国の対話や文化交流を促進しています。



キュレーター・  
エレヌ・ケルマシュテール



### 「フランス人間国宝展」

開催場所・東京国立博物館 表慶館  
開催期間・9月12日～11月26日  
月曜休館(9月18日、10月9日は開館、9月19日は休館)  
開催時間・9時半～17時(金曜、土曜、11月2日は21時まで、  
9月17日、18日、24日は18時まで、  
9月22日、23日は22時まで。入館は閉館の30分前まで)  
観覧料・1,400円(税込み)  
前売り券発売中(9月11日まで)  
お問合せ・☎03-5777-8600(ハローダイヤル)  
<http://www.fr-treasures.jp/>